

首藤 静夫

一人が即死する。驚いた相棒が馬で岩山に逃れるが、プリンナーはどこまでも追ってくる。遠くても隠れても目のセンサーが感知して追いかける。あとは追跡劇シーンが続く――。

ユル・プリンナー主演の「ウエストワールド」をTVで見た。五〇年前前のSF映画である。

プリンナーがAIロボット役。未来の最新科学の粋を集めたテーマパークでAIロボットが誤作動を起こし、暴走する筋立てだ。

友人二人が、西部劇の町を再現したテーマパークに入場した。通行人も酒場の人々も人間(客)かロボットか区別がつかない。精巧なロボットだ。酒場で喧嘩と撃合い。友人の一人が撃たれてギョツとなるが無事。体温センサーが感知し、生身の客に向けては弾がでない。逆に客が撃つとロボットに命中して倒せるのだ。そしてプリンナーは見事に撃たれ、死ぬ。

死んだロボットは修復される。外科手術のように破れた皮膚や内臓系統が交換される。

かくてプリンナーは生き返った。ところが雲行きが怪しい。中央制御室の制御が少しずつ狂い始めた――。

翌日、プリンナーと再会した二人は自分たちが撃たれないと高をくくっている。そして決闘だ。ところが、出ないはずの弾が飛んできて

急速に進むAIは、やがてこんな世界を作り出すのだろうか。人間とAIが似た顔、似た身体で共同生活する世の中が見えてきた。介護や防災、三Kの現場では援軍になることだろう。知能では囲碁や将棋などは既にAIに敵わない。俳句も危ない。他の文芸はどうか。人間が担ってきた領域は一つずつ減らされそうだ。

人間が堅実に正確に制御できる間はいい相棒になりそうだ。問題は制御する人間の不完全さと不道徳にある。コントロールを失ったAIが暴走する現実を考えたくもない。

他方で人間のAI化も進んでいる。若者の日本語は機械語のようだ。人間は考えなくなつた、感じなくなつた。想像力や夢と縁遠くなつた。そのうち、AIに人権を認める、AIとの結婚を認めるとなるのか。